洋学文庫
文庫8
C 310
2

西洋雜記巻之二

夢遊漫筆

小東洋　夢遊道人筆録

LINDTO.

西洋中興革命乃説

西洋開基より今茲辛酉の歳に至るまでおよそ五千八百零九年なりといへども開基より第三千九百四十七年にいたりて一聖王世に降誕す此王神靈聖德ありて諸國に教を施し文運大に開け制度全く備はれるを以て遂にその

聖王誕生の此年より中興革命の元年と称し（日本垂仁天皇四十一年漢の平帝元始元年辛酉ニアタル）西洋諸國にて其正朔を奉して別に年号を建ることなく今茲辛酉に至りては凡そ中興革命の第一千八百零一年なり

按ずるに唐土近傍の唐土文字を用ゆるの國の外もまゝろうその之れが國々の開基或ひは革命の年より以て元年としておに年号を建ることもなしといへども明史の外國傳に爪哇（ジャワ）國宣德七年入貢表書一千三百七十六年

蓋漢宣帝元康元年乃其遠國之始也また池北偶談に俄羅斯國以順治十七年遣使入貢不知正朔自称一千一百六十六年又康熙十二年土魯番表文の後に一千八十三年と称を係よしを記せり合せ考ふべし

「ヘブレラス」の此年史中に入て撰ず係説

上古の世に罷皂落你亜（バビロニア）國主「ナボカドネサル」はその父祖の業をつぎ世々西洋の大君にして國富み地廣く兵強く威盛んにして遠近諸國に於

これを畏るゝに於て驕慢の心日に増長し
て天地世界の内我にならぶ者なしとそすなち
鑄工に命して黄金を以ておのれが像を造らし
めその高サ十二丈幅三丈餘その國都巴必鸞城へ
の「デユラ」といふ平坦の地に於て大に群臣國
人を會し祭る時の音樂を奏し令を下して
曰く今天地の眞主こゝにいませば汝等悉く
しむでこれを拜すべしと己はその金像と共に
高臺の上に坐してその拜を受く又いましめし

拜せざる者はこれを天にそむくなり云ところ有
火中に投すべしとて側に大坑を鑿ちて火をそ
の中に熾にす西人みな其嚴威をおそれて拜
せざといふ者なし惟「ヘブレウス」の三人の少年
「アサリア」一名アブデナゴ」と云「アハニア」一名「サダニク」「メサツタ」一名「ミサアル」を
盛徳弘才の人にして世挙てこれを尊重せし者
なりしがかくて拜禮を行はず王是れを召てその
ゆへを問ふ三人答ていはく大王洪福ありて天命を
受て大國を治めたまふことは是天の恩徳に

ゆゝしや志らう風に今その恩を忘れて自ら天地
の主と称したまふはこれ臣等が君に叛きて
自ら王と称するに同じこれ大王自ら罪を天に
得たまふそのみにして臣等に大王を乱命なりと
思ひまいらんぞ其乱命にしたがひ奉らんや大王
いふまでもなし我は汝等が如何なる火坑の中
に誰人か汝を救はんや三人がいたく臣等をとゞまる
人の救ひが至たまふぞ焼け死なば死なん
のみ決して王の乱命にしたがふことゆるさじ

王いよ〳〵いかりて左右に命じて直ちに三人を
熾火の中に投入しむ三人うち火中に徐歩して
衣服身体すこしも焼焦れず容貌自若としてさく
恰も平生に異ならざりし群臣国人これを見る者驚き
異せざるはなかりしかば斯く大王大きに驚き悔て
自ら臺を下りて三人を請ひ招きて禮得して
罪を懺悔し直ちに命じて彼の所鋳の黄金
の像を毀たしめこれより三人に師として事へて
其言を用ひ国大きに治まりしとなり

天より瑣奪馬国を焼く説并に瑣奪馬の
異菓の説并西洋諸国男色を禁ずる説

西洋開基第一千九百四十九年（唐土夏后氏の世にあたる）「アツセイリア」国の人落徳(ロツトス)といへる者（按ずるに落徳は如徳亜国の聖人「アブラハム」の弟「ハラン」と云人の子なり）その母および妻子家人と共に家を将て瑣(リ)奪(ド)馬(マ)国にいたりて居住す瑣(リ)奪(ド)馬(マ)国もこれ如(ジュ)徳(デ)亜(ア)国の一部にして土地肥饒物産蓄盛にして居人して富を累へて西方有名の都会なり然して此時瑣奪馬国風俗壊乱して人倫の道を失なれ

（「アダマ」は太古「アダム」の遺址ニ「コモラ」又「コノモラ」と云これ如徳亜国の「ペンタポリス」別五城の一にしてその最北に位す則ち西洋開基第一千八百七十年の附近に所築なりと云）

男色を恣にしてその近郡「アダマ」「コモラ」の者も地と共に罪を天に獲たり天まさにこれに重罰を加へんとすその国中万民の内にただ落(ロツ)徳(トス)が一家のみ仁慈善良にして徳義著聞せる家に因りて天すなはち「エンゲル」（羽翼ある天人なり一名「ヘエノルボツテ」とも云ふ天使と訳する義なり）を使ひとして落(ロツ)徳(トス)に告て他国に徙しむ落(ロツ)徳(トス)がいそぎ此国の天罰をな実に達ただ萬姓殲滅を得る憐むべし「エンゲル」のいそぐ悪を羅もぜん何を以てか善を賞せん汝速に去るべし落徳すなはちその親眷家人と共に家を収拾し

「ドオデゼヱ」羅甸語にて「デッキエスアスハルテノス」と云

て他国に往かずして瑣奪馬(ツドマ)の界地をあれてき
を回望されば熾火の焔天に接すこれ落徳が界地
出らる地得ず天より大火地雨らし地より琉黄焔
硝を噴かしてさしも美麗なる瑣奪馬(ツドマ)「アタマ」「ゴ
モラ」の城邑人物草木鳥獣悉く焼滅して
曠漠の悪地となりて今なほいまにその跡なし
て地の悪きこと昔にかはらず傍に大湖ありて名け
く「ドオデセヱ」といふられ死海といへる是にして甚
湖中たへて魚貝等の生類なきなり　湖中恒

は大脂塊を湧出す人これを採て以て薬用に供す名
けて「ヨオテンレイス」といふこの湖頗廣しこれ昔時焼
れし時よりその土地多く焼け崩れて大半を湖中
に淪没せし縁なりといふ
「ヒブ子ルス」が所撰の萬國傳信記事の下編にいへ
く死海(ドラデゼヱ)の邊に一種の木を生すその形状我が歐(エウ)
羅巴(ロツパ)洲に所在の「オキセイア・カンタ」刺殊多き木なり和蘭語にて「ハア
ゲドヲルン」といふに似たり此木に菓をむすぶこれを「ラデン」語
にて「ポミユムソドミテキユム」といひ和蘭語にて「ソドム

ス・アッペル」といふ洲菓色鮮妍愛らしく白くして圓橘柚の小なるもの丶如く其肉とも白き種子満てり橘柚の瓣のいまだ曽て熟せざる者のに同じく液汁なくして渋し食ふべからず此菓日光経るにしたがひて幹の上に於て軋あむいち変して黒しこれを破らむ悉皆飛散して恰も灰塵の如しといふ洲菓の事を「ヨハン・ヤアエップァムテン」といふ人所撰の如徳亜(ジュデア)國の紀行書ならび「タキトス」といふ人所著の書また「ヨオセフス」といふ人ならびをす所の如徳亜(ジュデア)紀事の書等に載るところ皆おなじ相つたふ瑣奪馬(ソドマ)の地をそでに荒廃を天との奇異なる菓木を生してその遺址を識し以て後人を誡むる所なりといふ

按するに西洋諸國いまに至て男色を禁す風ことはきはめて厳密なりこれ其人倫の理にそむけるを以てなり蓋し女色淫乱なりとしてその分別なきを殆んと犬豕の行に似たり男色を犬豕だも敢てなさゞる所にして天理人

倫にそむくの最とし故に男色と称して「オンヒドクナフ・テエゲレ・デナテュウル」といふこれハ非法非禮にして人の生理に叛くといふ意なりこの故以て苟もこれを犯す者あれば立ろに火を以てこれを焼殺す諸國ことに是を號して「ソドミイ」といふ蓋し項奪馬(ソドマ)の近音なりたゞ意太里亜(イタリア)國においてハすなはち猛獣を以てこれを咬殺さしむといふ

蒙索禄(マウソロス)王塋陵の説

昔し西洋闢基第三千五百九十七年（日本孝安天皇の四十二年唐土周の烈王の十八年庚午にあたる）小亜細亜(アシアミノル)の嘉累亜國王蒙索禄斯(マウソロス)卒す在位凡そ二十四年なりその后亜尔徳弥細亜(アルテミシア)悲しみにたへず一國の力を竭して蒙索禄斯(マウソロス)王の塋陵を築しその規制すべて樓臺の如く層々上昇して極めて崇高なり内より外に至るまで悉く皆義なる玉石を以て造建しその制作の巧妙美麗なることハ筆紙につくしがたしこれまさに天下七奇の其一なり造建までに終らん

として后その夫王が憶念思慕して止まず
遂に病が成して殂す割を称すとぞおよそ
二年ありこゝに於てその弟「イデリキユス」位を
嗣くといふ

「アレキサンデル」大王諸將に宝物が賜ふ説并に
児に金が施す説

昔し「アレキサンデル」大王百児西亜(ペルシア)國が攻破りて
その國都「ペルセポリス」城に入る所此ところもこれ
百児西亜國累代の都にしてその金銀珠玉を
いふにおよばずその他奇異珍怪名を知らざる
の寶物きはめて夥しくして勝て計ふべからず
大王これを得て悉くその従ふ所の諸將士に分
ち賜ふ一臣ありて發して曰く宝物直に惜む心し
過て賜ふことあらば大王いたく我を諸將士
を以て無上の寶となし金銀珠玉なんぞこれに比
す所にあらんと盖し古今大業が興にの英主も
その識量萬國相かなはざるなり

頭書
「ピイテルケレルク」といふ人若干所の窮理奇

観の書にいはく「アレキサンデル」大王ただ徳絶世あるのみならず文学を尚ぶる事文人にすぎたり此時一大賢者あり「アリストテレス」といふ此人天文地理悉くきはめずといふ事なし大王是に師とし事ふ恒に曰く我天下の主たることはいまだ栄とするにたらず惟一人の「アリストテレス」を得てこれを師とする事を栄とはなすと云其賢を敬ひ士を礼する事この類なり此事は又艾儒畧が西学凡にも出たり

また「アレキサンデル」すでに東西諸国の大君となりて後曽て国中を巡行する時に一人の乞食者あり駕の前に迎ひて数銭を乞ふ大王左右に命じてこれに千金を賜ふ乞者大に驚きおそれていはく某は乞食者なりただ数銭を賜て足るのみ何ぞこの多金にあたらん人や大王のいはく汝は乞ふ事なりまた多数銭を乞ふるを知るのみ我は帝王なれば千金にあらざれば施すに足らずとて悉くその金をかの乞者に賜ひて帰らしめけりといふ

「コンスタンチニユム」帝空中に十字を見る説

むかし中興後三百零三年（日本應神天皇三十四年唐土晋恵帝太安二年癸亥にあたる）の比なりしに羅馬「キリイキス」諸国大に乱れてたがひに帝位をあらそひしかば羅馬の「コンスタンチニユム」帝（此帝の事上巻にも見ゆ）兵を以てこれを征伐して陣をとりし其日正午の時にあたりて忽ち空中に十字の形をあらはす其上に文字ありていはく「インホツク」「ヒンセス」これも汝かならず戦に勝といへる事なり諸軍これを見て驚異せざるといふ者なし此日

地白里河（テペリス）にて大戦して忽ちに勝利を得て敵の悪王「マキセンシウス」馬と共に河水に溺没すこれよりしておのづからいさゝか諸国の敵に勝ちて幾ばくもなくして欧羅巴（エウロツパ）洲諸国すべて太平続きにいたりといふ

主を弑する賊の雷霆に撃たるゝ説

むかし「キリイキス」国王「セノオ」在位十七年の頃いと驕暴不仁殊に甚し其后「アリアドネ」を羅馬の「レオ・タラキス」帝の女なりしを其の執政の臣「アナスタシリス」といふ者と私情を通し遂に相

議して欧羅巴中興革命第四百九十七年（日本仁賢天皇十年 唐土南斉の高宗建武四年丁丑にあたれり）「セイオ」乃酔臥せし所に乗してこれを車中に掩殺して葬る群臣ら人その威がおそれて敢て言が発ざりし者なしこゝに於て「アナスタシウス」を立て国王となしけれども「キリイキス」乃諸属ら馬則多泥亜歩而葛利亜翁加里亜等乃ものらなその乱逆が悪むでいかんて是によりておのおの兵が興してこれを伐ち数年のあいだ戦争やまず「アナスタシウス」性驕傲にして天地鬼神を敬ふ事を知らず「キリイキ」乃天文師「プロリキユス」なる者「アナスタシウス」が天罰にあたる人事があるを知す果して中興第五百十九年の（日本継体天皇の十二年 唐土梁の武帝天監十七年戊戌にあたれり）七月九日に大きに雷震す「アナスタシウス」これを恐れて正寝より他室に移りてこれを避すれども雷霆いよいよ震ひて遂に「アナスタシツス」を曳き出して地上に撃殺す「アリアドネ」后もましく死せりこゝに於て国人先王「ニオ」の王孫をむかへて位を嗣しめこれをとなふ々天地の両儀載する所と日月の照映する所とこれら

乱臣賊子いくんぞその縦まゝに志を得んや

「カアレル・コロオト」帝邪魔の祠を毀ほ説

沙頂泥亜(サキソニア)国むかしはその地「ウヱセル」「エルベ」両河の間に跨ぶりて甚大国なりし土人ことごとく邪魔を崇信し由へにその「ミレデンレ」「オスナ・ブリユツク」「セリング・スクット」「ハルベル・スタット」等の諸城ことごとく種々の邪魔を奉して奇異の形状を設ふ祠廟を立ほまくその「ヘルツ・ビユルグ」の城に一種の邪神何まられと「コロト」まく「パツデ・トルラル」と名くその像身を人かして首を亀鼈なり手に水桶を把て種々の花を盛る土人ことごとくこれを崇信す甚ほ此諸州まじて邏馬の帝の州郡となるまでその故令を受るにおよびて「カアレル・コロホト」帝悉く諸の邪神の祠字を破却し神像を斫砕きことごとくその諸地に右の諸聖賢の廟を建てその土人の僞俗を改めらる凡欧羅巴(ヱウロツパ)州偏僻の地にいたるまで政化行き施く行きれて人俗すべて善に帰せしも実に此帝の代なりすといふ

頭書
地志を按するに中興第五百年の比よりして「サキソニア」勢盛にして其主「ヘングスト」「オルスト」といふ二人の兄弟より「ホルスティン」の地より興て今乃「イギリス」國に至りて七の王國を建てまた其地を開きて殆んと入尓馬泥亜（ゼルマニア）の大半に君として又中興第六百年の比より「サルマシア」といふ北方の國よりして「ワルベン」一名「ウエンデン」といへる國勢のて入尓馬泥亜の南東諸州並に「ダルマシテ」「シレシア」博尼義亜「コロアチヤ」波羅泥亜等

の地に拠て其中まゝ多くの王ありて共に強勇なれとも尚ほ邪魔を信ず志ある中興第八百年の比に至りて「カアレル・ゴロオト」帝皆これを平けて或は教を以てこれを化し或は兵を進討破滅しまた「サキソニア」ノ主「ウ井ツテキンドス」を大に破てこれを残滅して諸國悉く帝徳に化すといふ
世紀を接するに「カアレルゴロオト」帝を「フランケン・ランド」國王「ヒヽス」の子にして「ネデル

「パルワ」の内なる「イヒゲル」へイム」城にて誕生し
王位を嗣ぐこと三十三にして西洋中興第八
百年に（日本桓武天皇延暦十九年唐の徳宗貞元十六年庚辰にあたる）入て皇統を嗣ぐ
在位十五年寿七十二大徳の主なりき「カア
ロリエス・マグニエス」と号す（「コロカト」「マグニエス」共に大にいへる義なり上巻「アレキサンデル」の註に見ゆ）以下疑らくは説文を

羅馬国銅甲の説

むかし羅馬（ロヲマ）国開基第四十八年（唐土周の桓王の十六年乙丑にあたる）其国
王「ニユマ・ポムピリウス」の世にあたりて空中に大な
る響ありてその音あたかも人の呼声に類すやゝ
久しくして天より一の銅を以て造りたる鐘
様のもの国都羅馬（ロウマ）城に落すその音大に地を
震ふ識者以て甲兵国を定むるの兆なりとす
これより数年前より意太里亜（イタリア）の総国大
に疫病流行し次て兵乱大に起りて諸州争
戦やまざりしがこれよりして諸敵のことごとく服ふ
ましく国中ますます平治せりその銅甲をいまに至

て彼方に旋す辨して「アレヒレ」といふ

聖人美瑟(モセス)の說

昔し西洋中興の時を去る事一千五百年前（今を去ること凡三千三百余年前にして唐土夏殷の頃なる）ゟ如徳亞(ジユデア)國に大聖人あり美瑟といふ聖徳神霊にして諸國の人にあまねくその教に化す後に埃入(エジツ)國に到りて教を施すに國人みな信従す國王これを怪み悪みて兵を遣してこれを害せんとす衆人すなはち美瑟(モセス)を保護して東に向て去る國王いよいよ

いかりて大軍三十六萬を興してこれを追ふこと西紅海(ロヲデセ)にいたる時海水忽ちに開けて陸地となるを美瑟(モセス)等衆人みな渡り去る埃入(エレツト)國王の軍卒も追ひ浩きたりてこれを渡りて海の半にいたるときに天より忽ちに狂風起りて暴雨を降し海水大に湧き揚りて三十六萬の大軍一時に溺死せりここより美瑟を亞刺比亞(アラビア)にいたりしに天その徳に感じて樹上に甘露を雨らしてこれに賜ふこれよりしてこの甘霧いまもり

至て絶ずとなり此地一生の間奇異の事跡甚
多しといふ美琹(モセス)が撰するところの曲禮法制の
書およひ上古の歴代史記等なる今の世に傳へ至
て諸国の規範とす美琹(モセス)の墓を如徳亜(ジュデア)の深山
の国中に在て諸人恒にここに至て禮拝を行
ふといへり

按るにここにいふ甘露則ち所謂甘露
蜜にして西語「マンナ」また「ホオニフ・ダアウ」と
いふ和蘭語「ホオニフ」を蜜と「ダアラ」を露といふ
今多く亜刺(アラ)比亜(ビア)国およ

び亜弗利加(アブリカ)の地に産すまた欧羅巴(エウロッパ)洲弗(フ)
郎(ラン)察(ス)国中の「ダウヒ子」これ拂郎察国にて世々その大字の緑食に供するの地なり
内「ブリアンソン」といふ所の地毎年八月に至れば加
なふば甘露降る而して「レエヱリッキ」といふ緑
樹上に降る事最多しその降れるの始を
露なりといへども忽ちに凝りて飴の如し
其味ひ沙唐に異ならば国人これを珍重をと
いふ

「キリイキス」国の名畫の説

昔し「キリイキス」国「アレキサンデル」大王の畫工「セウキンス」なる者かつて大王命によりて蒲萄を画くその彩色形状宛然として真のごとしこれを壁に掛るときは忽ち外の禽鳥これを見てきたりて真の蒲萄なりとして相集りて頻にこれを啄まんとせしとなり画図の巧妙至りては萬明をもて相かなふほど

取火鏡を以て敵船を焼く説

むかし西(シ)齊(ケ)里(リ)亜(ア)島「セイラキュサ」国王の天文師に亜(アル)尓(キ)幾(メ)墨(テ)得(ス)斯なる者あり資性霊慧にして事をなす毎にその妙智人意の外に出づ故に国王これを重んじて近侍大監の職を業としむ或る時羅(ロ)馬(マ)国と比(ヒ)産(サル)斉(カ)何(ゴ)国と兵を合せて「セイラキュサ」国を併せんとして数百艘の大船を浮め西(シ)斉(ケ)里(リ)亜(ア)の海上に陣にその兵勢甚盛にして島中の人皆震ひおそる此時亜(アル)尓(キ)幾(メ)墨(テ)得(ス)斯一箇の大なる取火鏡を鋳てこれを敵船のむかひ来る海岸の岩石の上に置きて天日に照映して敵船にむかはしめ鏡光と日光と相

照して光発して海上悉く火と成て數百船
一時に悉く焼亡して一艘も留めずとありこれ亜
尓幾墨得斯も天文測量の事にその志をとめて
深くしてその後臨終の時までも尚測量の図を
地に畫しならふ終ましとなり凹鏡をもって敵船
を焼しるすは「シモ子ベエルデンパン・キクステレイキ・ホルスト」
といへる書にその図説を載て「ホイス」と云人所撰
の字藝全書にもその事を記す又亜尓幾墨得
斯が国王の命によりて極て大なる船を造りたること

と然蘭国航海図説に記たるも此説は森島
氏紅毛雑話の中にその譯文を載たれば茲に贅
せず

天下の奇女といふ説

昔し羅馬の「コンスタンチニユム」帝の世に於て百
児西亜国主「オデナテイ」その勢ひ盛なり其后
「セメオビア」猛勇絶倫にして衆みな畏服し学才
殊に秀てよく阨入多・西利牙尼勒祭亜・羅甸等
諸国の文字言語に通ず恒に其夫王と共にし

兵を用ひて諸国を征伐し陣行のたむごとに奇
計を以て敵に勝ずといふことなし遂に大業
を成しては「ウヲンドル・フロクト・ハン・ガンツセ・ウエレルド」
といふこれ天下の奇女といひし縁差なり

入尓馬泥亜国にて異獣を得たる説

「サルワ・ビユルグ」を入尓馬泥亜国の「ベイエルス」道に属
する縁の地にして其の国山岳多し僧官の主なりて
これを治む西洋中興第一千五百三十一年本邦の享禄四年明の嘉靖十年辛卯にあたれる猟人此地の深林におゐて一箇の怕るべ
き形状の異獣を得たり全身毛あらたぐ濃厚に
して其色淡黒四足を具してその爪きをめて尖利
頭面すこしも人に異ならず一たび吼るときは其声地
に震ふ猟人これを生ながら捕へて僧官の府城に
輸するを以て奇観ありとにきうれども絶て飲食
せずその性情および食料得て量り知るべからず
凡そ三日ありて斃るといふ

和蘭国にて海中の女人を得たる説

西洋中興一千四百零三年本邦の應永十年明の永楽元年和蘭国「フ

リイス・ラント」の人その部内の「ペヱユルメルメヱル」といへる海灣の水中に於て一の奇物を得たりその身體形貌悉て女人にすこしも異なることなしすなはち是を「ハアルレム」（和蘭陀国中都會の地名）に送るこれに衣服を与へしに是を則ち著たりこれに飲食をあたへしにこれを食ふただ唖にしてもの言ふ事あたはざるのみ神像を見ればよく敬を起して俯伏し且主これを与へたり且奇なるとして衣食を豊給し存活せしむこと多年なりただこれ人に

似たる人にあらざるその性情および海中に在てはそのいかなる所に在て何をなすものなるや知るべからずまことにあやしむべし

按ずるに明儒の飜訳せる万国図説および坤輿外記に二百年前西洋喝蘭達の地の海中にて一の女人を得たるよしを記すものすなはち是なり西書にこれを「ゼーメンス」（zee mens 海人といふ）また「ゼエ・フロウ」（海女の義）と記せりまた按ずるに洽聞記稽神録續墨客揮犀等に海人の事

を説き草木子に金の時水中に人の形現はる
係るを論じとなどもまた人類なるかたぐひ出明
相通ずる事を知るべからずの言なきを蓋し人魚
の類乎（人魚のことは六物新志に詳之故ここに贅せず）

波尔杜瓦尔国識記の説

西洋中興一千七百五十五年に（日本宝暦五年清の乾隆二十年乙亥にあたる）
波尔杜瓦尔（ポルトガル）国「ヨオセフス」第一世の王（一名「ヨオセフス・エマニユエル」と云此国の王の大子なりし「ヨハンネス」第二世）の世になりて其国都里西波亜（リスボア）城に
大地震ありて城垣崩壊し都内の人家摧倒す

ること九万五千余家城下の得若（タアヨ）といふ大河
に浮める大船一艘海水の鳴動に随ひ山の樹に掛る
地震の響きを承けた入尔瑪尼亜（ゼルマニア）払郎察（フランス）等の地に
きこゆ実に近世の奇変なり初め波尔杜瓦尔（ポルトガル）国の
始祖「ヘンリキユス」なる者の此国を開基して里西波亜（リスボア）
城を築く時に賢者未来の事を前知せる者ありてい
はく此城造建より後よく六百六十六の数を保つ
べしと其事載せて「ヨハンネス」といふ人の記録に有
り其これを築きたるは中興第一千零八十九年の事

なり（日本寛治三年宋の哲宗元祐四年己巳にあたる）かくして此地震の時より
いたるまで凡そ六百六十六年なりといふ嗚呼奇
といふべし

伊斯把你亜国人呂宋国を奪ふ説

附「テ井ユス」国女王「カルタゴ」城を築く説

呂宋（ロソン）国は亜細亜（アジア）洲南海淅利皮那（ヒリヒナ）諸島の一にし
て其地最大なり土気暑熱にして多く米穀
諸草胡椒肉桂沙糖黄金真珠等を産す西洋の千
五百七十二年に（日本の元亀三年明の隆慶六年壬申にあたる）伊斯把你亜（イスパニア）国の人

併せしこれが有ち都督を置きこれを治る僧官を
署して教を布く明世諸書にいはく伊斯把你亜（イスパニア）
人（旧本に仏郎機に作る者を誤りなり今これを改む）此国に通商し其国兵弱くして
奪ひ取るべき計をなし先づ黄金を其国王に貢
して牛皮の覆ふだけの地を乞てこれに居らんことを
請ふ王これを許す伊斯把你亜（イスパニア）の人則ち牛皮を細く
長く裁して縁となしこれを以て多くの地を廻繞
してこれに城郭を建て兵備を厳重にす王これ
をいかんともすること能はず其の後遂に兵を以て

國都を圍み王を殺してその地に據るといふまて劉居仲が撰する所の鄭成功傳に和蘭の人臺湾の地を據るの事を記すその牛皮を裁の事まゝこれに同し再び西史を按ずるに昔し「テイルス」國の女王「デド」なる者甘的亜島を併せ遂に「アフリカ」の地に行き寶を其土酋に遣て牛皮の覆ふ限りの地を乞ひ得て遂に牛皮を細く裁て線となして多くの地を圍み要害堅固なる都城を築きて「カルタゴ」と名けこれを基となして

次第に其邊の諸洲を併せたりといふこれ西洋開基第三千零八十年の事にして（則ち唐土周の厲王の十一年癸巳に當れり）今を距ること二千六百二十五年前なり蓋し伊斯把你亜若くは和蘭の人此女王故智を用ひたるものなるらん

西洋雜記巻之二畢

本書の初めて刊行されたのは昌永没後四十年を経た嘉永元年で、夢遊道人著全四冊「西洋雑記」と題し江戸書林鈴木文苑閣から発売された。本写本はその末尾に「天保十五年十六江戸において瓦町万屋平兵衛方ニ求之」と旧蔵者の識語あるを以てその刊行前既に伝写流布されていた事が知られる。本書を刊本と比較するに、巻数は相違すれど内容はほゞ全く一致する。但し本書には誤写甚だ多く刊本の正確なるに遥かに及ばざること遠し。当然本写本末尾には刊本になき所の「夢遊秘書」と題する昌永の著書目録が載せてあるので其点は大に参考となる。

昌永の著書は本書以外に刊行を見たるものなく他は原稿として遺されたのであるが、その多くは夙く散逸して世に知られていない。本目録によりて僅に其欠を補ふことが出来る。

嘉永元年三月

墅之花園　播磨屋勝五郎蔵版

四冊本

119
3815 (1-4)